修士論文（要旨）

就業体験におけるリアリティ・ショックが
大学生の就業動機とアイデンティティの感覚に与える影響について

指導　井上直子准教授

国際学研究科

人間科学専攻

臨床心理学専修

208J5006

岡田英哲

目次

第 1 章　問題の背景と所在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第 2 章　目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

第 3 章　方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

第 4 章　結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

第 5 章　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

第 6 章　結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40

Ⅰ．問題

青年期にはアイデンティティ形成が発達課題となる（Erikson，1959）。アイデンティティの模索は様々な領域において試みられるが、中でも職業選択はアイデンティティ形成のための重要な領域の１つである。しかし、職業を決定し、企業に入社した新卒の大学生の3 割が３年以内に離職している（内閣府，2009）。このことから、個人は組織参入後、社会が求める“私”と、私が感じる“私”の間でアイデンティティを問い直し、折り合いをつける必要が生じることが考えられる。

そのため、組織参入前に企業活動を知り、そのうえで職業選択を行うことはより確かなアイデンティティの形成を促すことにつながると考えられる。在学中に就業体験を行う機会として、インターンシップが挙げられる。インターンシップへの参加はアイデンティティ形成のために青年が行う職業的役割実験ともいえる。しかし、心理学の分野において、インターンシップへの参加が学生に与える影響を調査した研究はほとんどない。

インターンシップ以外の就業体験に範囲を広げると、保育士や看護士といった特定の職業育成課程で行われる実習体験に関して心理学的な研究が行われている。実習体験を通して学生は態度や職業観を変化させることが示されている。この変化は、理想と現実のギャップ、すなわちリアリティ・ショック（Schein,1978）として捉えることができる。インターンシップにおいても同様に、実際の企業の活動に携わることによって感じるリアリティ・ショックが、学生の職業観やアイデンティティの感覚に影響すると考えられる。

Ⅱ．目的

本研究の目的は、就業体験で感じる理想と現実との違い、すなわちリアリティ・ショックが、就業動機および青年のアイデンティティの感覚に、どのような影響を与えるかを検討することである。

Ⅲ．方法

夏季休業中（8 月）にインターンシップに参加する大学学部生 59 名を対象とし、質問紙法による調査を 2 度行った。第 1 回調査がインターンシップ参加前の 7 月、第 2 回調査がインターンシップ参加後の 9 月であった。

Ⅳ．結果と考察

本研究では、第 1 回、第 2 回ともに回収でき、前後比較が可能である 32 名（対象者の54%）を分析の対象とした。

分析の結果、インターンシップを通して学生は、「職場の人間関係」「働く社員の姿」など多くの領域でポジティブなリアリティ・ショックを受けていた。また、アイデンティティの感覚の「心理社会的同一性」が 1%水準で有意に上昇した。このことから、インターンシップの体験を通して、学生は社会との適応的な結びつきの感覚を強めた可能性が示された。個別事例の検討からは、働くことに対してネガティブなイメージをもってインターンシップに臨んだ対象者のうち、現実がポジティブであった場合は就業動機が高まり、現実がネガティブであった場合は変化がない（もしくは低下する）ことも読み取れた。また、自分自身の能力が実際の社会の中で十分に発揮されると実感できることが、アイデンティティの感覚を高めるために重要であることが示唆された。

今後の課題として、対象者の人数を確保することと、幅広い職種・業務形態・学年を対象とすることが挙げられる。また、学生のリアリティ・ショックが、入職者のそれとどのように異なるのかに関する検討が必要であろう。加えて、大学生が学生生活に戻ってきたあと、インターンシップでの体験をどのようにまとめるのかに関する、長期的で総合的な視点が重要であると考えられる。

参考文献

青谷法子・三宅章介　2005　企業と若年者の仕事に関するミスマッチとキャリア形成についての一考察　――特に、コミュニケーションの果たす役割を中心にして――　東海学園大学研究紀要，**10**（A），1－24.

浅海典子　2007　学生にとってのインターンシップの成果とその要因　国際経営フォーラム，**18**，163－179.

安達智子　1998　大学生の就業動機測定の試み　実験社会心理学研究，**33**（2），172-182.

Barnard,C.I.　1938　The Functions of the Executive Harvard University Press.（C.I.バーナード著　山本安次郎・田杉競・飯野春樹訳　1968　新訳　経営者の役割　ダイヤモンド社.）

Erikson,E.H.　1959　Identity and The life sycle, International Universities Press,Inc.（E.H.エリクソン著　小此木啓吾訳　1973　自我同一性　アイデンティティとライフサイクル　誠信書房.）

亀井美弥子　2006　職場の新人にとって働くということ--働くことを通したアイデンティティの変容（特集 若者が働くということ--発達心理学的な視点から）　発達，**27**（108），50－57.

Marcia,J.E. 1966 Development and Validation of Ego Identity Status. *Journal of Personality and Social Psychology*，**3**，551-558.

松井洋　2004　自己理解のための青年心理学　八千代出版.

松永しのぶ・坪井寿子・田中奈緒子・伊藤嘉奈子　2002　保育実習が学生の子ども観、保育士観におよぼす影響　鎌倉女子大学紀要，**9**，23－33.

宮脇美保子・藤尾麻衣子・島田千恵子・小元まき子・寺岡三左子　2007　4 年制大学における看護学生の職業的社会化――2 年生を対象として（第 2 報）　順天堂大学医療看護学部医療漢語研究，**3**（1），64-68.

内閣府編　2009　平成 20 年青少年白書　国立印刷局.

尾形真実哉　2004　予期的社会化の相違によるリアリティ・ショックの比較　――看護愛学生と一般大学生を対象としたパネル調査から――　経済行動科学学会年次大会発表論文集，**7**，296-305.

尾形真実哉　2008　若年就業者のキャリア展望と組織定着の関係に関する実証研究　――専門職従事者と非専門職従事者の比較を通じて――　甲南経営研究，**49**（3），41-65.

Schein,E.H. 1978　Career Dynamics matching individual and organizatioal needs, Addison-Wesley Publishing Company,Inc.（E.H.シャイン著　二村敏子・三善勝代訳　1991　キャリア・ダイナミクス　白桃書房.）

城仁士　2007　インターンシップ体験が就職活動に対する自己効力感に及ぼす影響　日本教育心理学会，**49**，671.

新名主雪絵　2005　インターンシップ生は何を得られたか？――実習プログラムとコミュニケーションから見えてくるもの――　労働社会学研究，**6**，41-72.

谷冬彦　2001　青年期における同一性の感覚の構造　―-多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成――　教育心理学研究，**49**，265 - 273.

山田剛史　2004　現代大学生における自己形成とアイデンティティ　――日常的活動とその文脈の視点から――　教育心理学研究，**52**，402－413.